

## ドル体制に関する一考察

龍谷大学 前田直哉

今日の国際通貨体制はドル体制である。同体制のメカニズムの今日の特徴とはアメリカが大幅な経常収支赤字あるいは対外投資の継続を通じて巨額のドル残高を累積させ、それを反映してドル相場が長期趨勢的に下落しているが、インフレを重視し、国際収支を放任する政策スタンスの継続を可能にしていることにある。

この現実を前にして従来支配的であった「ドルの垂れ流し→過剰ドルの累積→ドル危機」という見解が説得力を低下させている一方で、「ドルの安泰」を謳う見解が新たに登場した。以下では煩雑を避けるために前者を「ドル危機論」、後者を「ドル安泰論」と称する。端的に言えば、「ドル危機論」はドル危機の必然性を根拠にドル体制の崩壊を示唆している。それに対し、「ドル安泰論」は「ドル危機論」を批判し、ドル体制の健全性を根拠に同体制の維持を主張する。問題は議論の対立が平行線を辿り(具体的には議論がドル危機は必ず起こる・起こらないという点に偏り)、その建設的な発展が見られないことである。本報告の目的は「ドル危機論」、「ドル安泰論」を批判的に検討し、それぞれの問題点を踏まえながら、ドル体制の実態を浮き彫りにすることにある。

本報告は次のように進める。まず、「ドル危機論」と「ドル安泰論」の問題点を示す。続いて、その問題点を踏まえながらドル体制の今日的メカニズムについて考察し、アメリカが巨額のドル残高を累積させながら、インフレのみを重視する政策スタンスの継続を可能にするためにどのようなメカニズムが働いているか、そのメカニズムの反転はどのようにして生じるかについて明らかにする。最後に、以上の考察と戦間期の国際通貨競争を交えてドル体制の今後を展望することにした。